

36～38の資料は、葵文庫中の兵法書のうち、諸術調所、箱館奉行所旧蔵書以外のものである。

36	精校海国兵談		
	A J -21	嘉永 4 (1851)	林子平著
	ロシアの南下に警告を発し、対外兵備の急を唱え、水戦・砲戦などの重要性を説いた兵法書。 初版の書名は『海国兵談』。		

- ◆ ロシアに捕らわれ、カムチャツカに流刑されていたハンガリー人将校ベニョフスキー（Moric A.A. Benyovszky 子平は『海国兵談』序文の中で、バロンマオリッツ・アラアダル・ハン・ベンゴロウと記している）は、明和8年(1771)に脱走して阿波に漂着した。ベニョフスキーは、オランダの商館長あてに書簡を送り、ロシアの南下政策について警告を発した。これは、日本がロシアを意識する初めての契機となった。このような情勢の中、林子平(1738－1793)は海防の緊要なることを説いて『三国通覧図説』と『海国兵談』を著した。

本書の表題である「海国」とは、国防的観点からみた日本の地理的特質を指す。「地続きの隣国をもたない『海国』日本には、それにふさわしい国防体制がなければならぬ」、これが本書の根本命題となっている。なかでも子平が重視したのは、日本の中枢部というべき江戸沿海の防備である。彼は、「細かに思えば、江戸の日本橋より、唐・阿蘭陀迄、堺なき水路なり」という有名な警句をもって、江戸湾に異国船の侵入する可能性があることを指摘し、同湾の防備が急務であると指摘している。後に対外関係が急迫を告げると江戸湾防備は焦眉の問題となった。子平は、本書でこのことを初めて予見したのである。

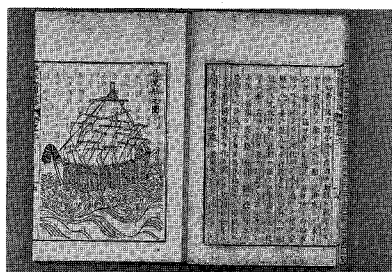
刊行は寛政3年(1791)4月であった。同年12月、子平は出版取締令違反の疑いで幕府に召喚された。寛政4年5月、老中松平定信は、「世間に無用の不安をおこす」との理由で本書の絶版を命じ、子平には蟄居を命じた。しかし、わずか4か月後の9月にはロシアからラックスマンが通商を求めて根室に來航し、子平の予見が現実のものとなった。

寛政5年(1793)6月、子平は没したが、天保12年(1841)に罪を許された。これに伴い本書の発禁も解除され、嘉永4年(1851)に『精校海国兵談』と題して再刻された。

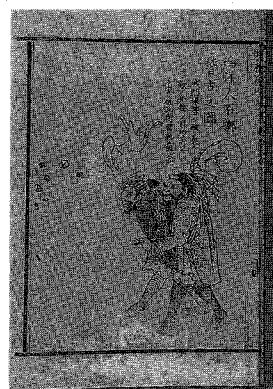
- ◆ 当館所蔵本は嘉永4年(1851)の再刻版(全10巻10冊)である。「静岡学校」「静岡師範学校」「矢口氏所蔵記」の印記をもつ。

また特殊コレクション「岡野氏文庫」に、写本全5冊(092-1-21)がある。

<参考文献> 『新編林子平全集 1』(活字版)(081.5-ハ1)



36 精校海国兵談



36
精校海国兵談